



2010年1月27日放送

漢方医人列伝「吉益東洞」

北里大学東洋医学総合研究所 所長 花輪 壽彦

吉益東洞は、1702年から1773年に活躍した江戸時代の代表的な医家です。名前は為則、通称周助、はじめは東庵と号していましたが、後に東洞と改めました。

安芸の国、いまの広島県の出身で、はじめは武をもって身を立てることを望みましたが、後に医を志し、まず吉益流の金創術、要するに外科術、それから産科の術を学んだのですが、後に本道と呼ばれる内科に転向して古医方の研究に打ち込みました。学ぶうちに陰陽五行説に対して疑問を抱くようになり、30歳代に『傷寒論』『金匱要略』に基礎を置く独自の医学体系を創りあげました。

1738年に「天下の医師を治療せん」という大志を抱いて京都に上がったのですが、意に反して生活は困窮を極め、人形作りとか鉢皿を焼いたりして糊口をしのぎました。このあたりのことは森立之の『遊相医話』にその内容が出ていますが、やがてあるきっかけがあって山脇東洋の推挙を得て世に出て、一世を風靡するようになりました。彼は、伝統的な医学理論を否定して病はただ一毒より成るという、いわゆる“万病一毒説”を作り出し、この“毒”を排除するのが治療の根幹であると考えました。その医説は、鶴元逸がまとめて『医断』として題して1759年に出版され大反響を呼びました。

また、『傷寒論』『金匱要略』の中の220処方の条文を処方ごとにまとめ、自らの意見を

加えた『類聚方』を著し、古方の運用の規矩を示しました。

薬物についても、『傷寒』『金匱』の処方中に含まれる薬物の薬効を類推して『薬徴』を出し、たとえば「石膏は煩渴を治す」という表現をとるなど、それまでの伝統的な薬物学書とはまったく異なる本を出しました。

東洞の出現以後、日本の漢方医学は伝統医学理論によらず“方証相對”を主とするようになりました。その大きな原動力となったのがこの吉益東洞の医説です。

弟子としては、村井琴山や岑少翁、中西深齋などが傑出した存在です。代表的な著書は、『類聚方』『方極』『薬徴』の三部作のほか、『方機』『医事或問』『古書医言』、さらに治験をまとめた『建殊録』などがあります。

『類聚方』の冒頭に「医の学たる方のみ」とあるように、医学とは処方学であり、陰陽五行説など途中の理論はどうでもよく、その処方を出す根拠は腹診であるとししました。お腹をみることで証を決め、証に対して処方が決まるという日本漢方の特徴を明確に示したという意味で、東洞の位置付けは非常に大きなものがあるといえます。

東洞の“毒”という言葉についてはいろいろな意見があります。彼自身は、『呂氏春秋』という古典から引用したと述べていますが、私が読む限りでは『呂氏春秋』には“毒”という言葉は見当たりません。東洞の著作である『古書医言』の注に「気は鬱すべきにあらず、精流れざれば即ち鬱して毒をなし、毒あれば即ち気行らざるなり」とあり、後藤良山の“一気留滞説”を批判する形で“毒”という言葉が出てくることから、これは東洞の命名であることがわかります。

“万病一毒説”を理論的な面から考えてみると、東洞は“毒”について次のように述べています。

第一に治療者（疾医＝疾病を治す医者）の考えるべきことは病気の要因をあれこれ憶測することではなく「治す」ことだと述べます。

第二に、病気を治すためには、病因も病名も無用であり、ただ目標があれば十分で、その目標を東洞は“毒”と名付けたわけです。

第三に、“毒”は後天的に体内に生じたものであり、多くは腹中にあるから腹診によって手に触れる実体として把握できる。“毒”があることが病気ではなく、「毒が動く」ことが発病であると述べています。

第四に、目に見えるいわゆる“見証”としてのさまざまな病態の相違は、“毒”の存在部位の相違であるという言い方もしています。

第五に、“毒”の存在部位によって処方が決まる。処方が目標に命中したかどうかは瞑眩によって知ることができると述べています。東洞は、有名な「若し薬、瞑眩せずんば、厥の病、瘳えず」という言葉にあるように、特に峻下剤、巴豆・甘遂・大黄などを含む丸散剤という強い薬を飲ませて瞑眩させることで“毒”を排除するという治療をしました。

第六には、体内に“毒”がなければ外邪があっても発病することはない。したがって、“毒”

が動かぬうちに排除すれば、いわゆる未病を治すことにもなると東洞は述べています。

では、なぜ東洞は“毒”という言葉を使ったのか。吉川幸次郎先生の『仁齋・徂徠・宣長』（岩波書店）という書籍には、仁齋学、徂徠学、宣長学と称される古文辞学には共通の顕著な考え方があると指摘されています。

その第一は、宋以降の儒学、空泛な理論によって複雑な現実を処理しようとする哲学への反発であり、第二には、古典の解釈をその言葉から出発させる方法をとっているということです。つまり、言葉の正しい解釈、正しい意味をもう一度考え直そうというのが東洞の時代の儒学の思想であったわけです。

その中で吉益東洞は、『荀子』の考え方に大きな影響を受けます。

『荀子』正名編には、実体を伴う正しい名前を付けなければならないという記述があり、東洞はこれにしたがって“毒”という言葉をも自分の理論の中に組み入れたのではないかと考えられます。

もう一つは、“毒”というものの実体ですが、東洞は「目に見えぬものは言わぬ」とします。では、「目に見えるもの」とは具体的に何かといえば、それは腹診として捉えられるものということになり、腹診が“毒”の在りかを実体として把握する最もよい方法ということになるわけです。

このように東洞は、『傷寒論』の処方と独自の丸散剤を多用して“万病一毒説”を作り出しました。一説に、“毒”というのは当時の疾病構造として梅毒の流行があったことから、これに対応するためには峻下剤を用いなければならなかったという時代背景もあろうかと思えます。

ともかく、こうした東洞の出現によって、日本漢方のいわゆる“方証相對”というやり方が普及したという意味で、歴史的に意義のある医家であるということがいえるかと思えます。